

留学記(4)

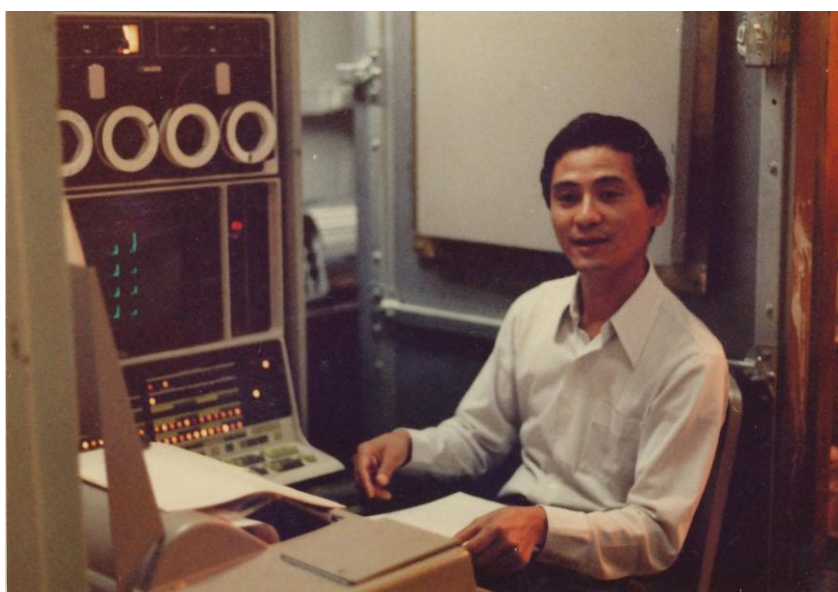
小嶋祥三

最後に、自分のことも少し。1978年9月にNIMHのPatricia Goldmanのラボに移った。移ると、Richard Nakamuraがコダック?のインスタントカメラで写真を撮りにきた。Lab. Neuropsychol.のメンバーの写真が廊下にあったが、そこに加えるという。帰国する時にそれをもたらってきたが、それを載せる。隣の写真は服装から、もう少し後に撮ったようだ。



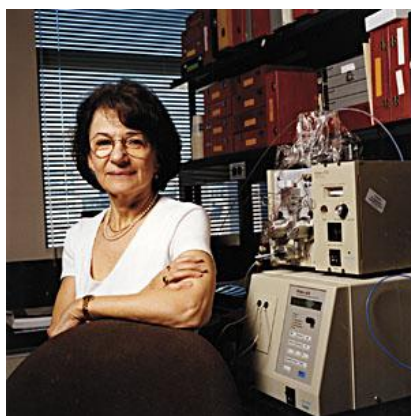
Patのラボでは主に、遅延反応課題中のサルの前頭前野の神経活動の記録を行った。わたしの前にはFusterの共同研究者だったG.E. Alexanderがおり、前頭前野の冷却の実験を行っていた。かれは今は大脳基底核の研究を行っているようだ。Patは神経心理学、神経解剖学、神経化学が専門だったので、神経生理学的な研究も加えたかったのだろう。ただ、設備はとても十分とはいえなかった。増幅器、データレコーダはあった。というか、これしかなかった。ウィンドウ・ディスクリミネータはあったかどうか…。課題制御に関して、日本では論理素子による自作の回路から、ミニ・コンピュータ(PDP-8)に移行していた。神経生理の実験はPDP-12で行っていた。まさか、ウイスコンシン汎用テスト装置WGTAを使うわけにはいかない。仕方ないので、遅延反応課題を論理素子で組み、神経活動はデータレコーダに記録した。ラボの人たちは課題制御回路を作っただけで驚き、誉めてくれたが、神経活動の分析がまどろっこしくていけない。Patにコンピュータはないだろうかと訊ねた。Patは直ぐに探してくれたようで(Patのこのようなところは素晴らしい)、しばらくすると使われていないPDP-12がやってきた。これで先が見通せるようになった。

PDP-12のアセンブラでプログラムを書くことは霊長研でやっていた。アメリカでは技術スタッフがいてプログラミングをやってくれるかもしれないが、日本で神経生理実験をやる者にとってそれは必要な技術、知識だった。Lab. Neuropsychol.ではそのようなスタッフはいないので、自分でプログラムを書いた。Patたちはわたしがそのような技術を持っているとは思わなかったようで、プログラムが動くと驚いた。わたしにとっては特別なこと



ではなかったのだが…。実験室のPDP-12とわたしの写真を載せておく。その時からだったろうか、わたしに対する評価が高まったように感じた。以後、実験は順調に進み、1年半の滞在で遅延反応と前頭前野のニューロン活動の論文を2本、前頭前野切除の論文を1本Brain Res.誌に発表することができた。

Patricia S. Goldman-Rakic でググれば (こういうようですね)、Nature, Rakic とともに創刊した Cerebral Cortex, Neuron など、たくさんの追悼文がでてくる。彼女が卒業した名門女子大 (今は共学らしい。最難関校の一つだそう) Vassar College の 'Encyclopedia' の文章で、彼女が双子であることを確認した。Pat はわたしのひどい英語を辛抱強く聞いてく



れた。アメリカでは英語がうまくしゃべれないと相手になろうとしない人がいるが、Pat はそういう傾向は皆無だった。Rakic がユーゴスラヴィアの人だったことも関係しているかもしれない。Pat はわたしが英語のために能力を発揮できていないと心配してくれたフシさえある。わたしは彼女より5年も長く生きている。とにかく、Pat には感謝している (左の写真は Yale 時代のものだろう)。